

第1回 大通公園の魅力と機能の向上

従来からの役割の継承・強化と新たな可能性の検討

現状

- 1989年再整備当時の大通公園は5つのゾーニングが設定されている。
- 沿道施設は、業務施設が多く集積している他、商業施設や行政施設、文化施設、共同住宅等が散見される。また、一部のエリアにおいて土地利用の変化がみられる。
- 大通公園では、利用者、利用時間、利用目的の変化がみられる（平日の夕方から夜間にかけて利用割合が高まっていること、平日の日中は保育園児の利用が多く見られるようになったこと等）。

主な意見

- 細長い形の公園であり、各区画で公園周辺の土地利用や都市計画上の位置付けが異なるため、それも考慮し、使われ方や位置付けを考えなくてはならない。
- 歴史的なことも考えると、3～7丁目までを長岡安平が描いた絵があり、区画ごとに歴史的な経緯も異なるので、それをどう継承するかも大事。
- 都心の保育施設には外遊び環境は大事。子供連れの利用を充実させる方向性で検討してほしい。
- これまでのプレイスメイキングの結果や評価を共有するの新たな可能性の議論に良いのでは。
- 観光客と市民利用を両立するためには、午前中は市民向け、午後は観光客向け等のタイムゾーンの分割も考えられる。

課題・考察

- 緑の豊かさは当時から魅力の一つで、都心における貴重な散歩・休息地としての機能は、現在も重要視されている。
- 再整備当時と比べ、沿道施設の機能に変化があり、公園のゾーニングと沿道施設の機能の一体化に向けた検討が必要。
- 沿道施設の機能や丁目毎の利用の変化から、現在の利用ニーズに合わせた新たな公園の役割を考える必要がある。

老朽化に対応した大通公園の再整備の検討

現状

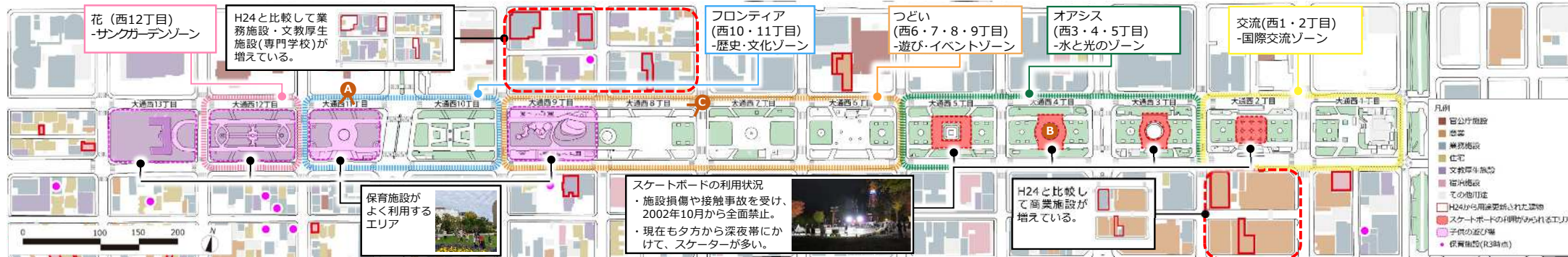
- 1989年再整備当時からおよそ30年が経過し、公園施設全体の老朽化が進んでいる。特に機械設備系の老朽化が深刻である。
- 公園施設に対する改善ニーズがある。
- 再整備当時より樹木が繁茂している。

課題・考察

- 増加する老朽化施設への対応及び施設整備費・維持管理費の確保が課題。
- 樹木の繁茂に伴い、公園内外の見通しの阻害や、沿道との一体性の喪失が課題。
- 老朽化による課題の他、利活用ニーズとの乖離も生じていると考えられ、丁目毎に最適な施設更新のあり方に係る検討が必要。

主な意見

- 大通公園内の樹木は30年前から本数がほぼ変わらず、現在は過密状態である。良好なみどりの環境づくりの観点から適宜間引くことが必要である。視点を明確に示して健全な緑を育成することに思い切って踏み込んでほしい。
- 銅像や碑の維持もお金はかかる。撤去に際しては議論を呼ぶと思うが必要に応じて考えていくべき。
- 水の施設は市民の方々の親しみもあり、ある程度必要だが、現状維持していくべきかは検討が必要。
- 水を使う施設は、環境やコストも考慮すると、省エネルギーの効率的なものへの変換が必要。暑さも増してくるため、水遊び場の需要が増えていくことも考えられる。



大通公園の回遊性の向上に向けた議論と検討

現状

- 大通公園周辺にはまとまった緑化空間が存在するほか、公開空地が増加している。
- 地下空間と沿道建物への接続が増加している。
- 公園内の移動経路部分についてはおおむねバリアフリー対応済み。
- 大通公園の出入口と南北方向の横断歩道の位置関係がずれている。
- 公園側歩道部には不法駐輪状況が見受けられる。

課題・考察

- 公園への動線として、現在の東西方向のほか、南北方向のネットワーク形成を考える必要がある。
- より一層のユニバーサルデザイン化が必要。
- 周辺公開空地の増加は、回遊性の向上及びみどりのネットワークの形成にも寄与。
- 地下空間や沿道建物への接続が充実し、大通公園は都心部の回遊拠点のハブとして考えられる。

主な意見

- 公園側歩道部は自転車の駐輪を呼び寄せているような形になっていないか。
- 公園南北両サイドが道路のため、外縁部を歩かせることは子どもの保護者にとっては危険を感じる。
- 街路と公園の境界を外し両側から議論した方がよい。
- 沿道施設、地下の交流拠点を公園と一体的に見て、方向性を議論していくことは欠かせない。
- 徹底したバリアフリーへの取組をアピールできればよい。



民間事業者と連携した公園整備手法の検討

現状

- 噴水や記念植樹など多くの事業者の寄贈による民間資本を活用した整備が行われてきた。
- 指定管理者による維持管理のほか、ボランティアや花壇推進組合との連携など官民連携による維持管理を行っている。
- 築40年以上の建物が増えており、周辺地区での再開発の気運が高まっている。
- 都市公園の民間活力導入の手法が多様化。

課題・考察

- 整備・運営の両面から民間事業者と様々な手法で連携していく必要がある。
- これまで培ってきたボランティアや民間企業が参画しながらの公園維持管理については、レガシーとして受け継いでいくべき。
- 持続的な活動やより質の高い管理を見据え、官民連携のさらなる発展について検討が必要。

主な意見

- 札幌という北海道の中心都市における公園としてマネジメントのあり方を考える必要があり、そのためには議論を始める最初に、大通公園の位置づけや方向性を定めることが重要。
- 本来的には札幌を象徴するセントラルパークでもあるのではないかと。
- 無理にニーズを詰め込まないことが重要。沿道、札幌駅前通、北三条広場も含めた空間利用を考え、大通公園のあり方を決めることが重要。多様化するニーズへ柔軟に対応できるものを、民間事業者との連携や周辺のまちづくりの話も見越して考えるべき。
- 大通公園におけるボランティアの活動レベルは高く、新規参加者もいるため、活動の持続性は今後も期待できる。

第2回 「いこい」と「にぎわい」の両立

日常利用とイベント利用の使い分け

現状

- 札幌を象徴する景観を有し、**日常利用とイベント利用の両方が魅力**として市民に認識されている。
- 1年を通して**様々なイベントが実施**されており、**経済波及効果も大きい**。
- 平成25年時（10年前）と比較すると、**大規模イベントの種類、実施範囲が増えている**。

課題・考察

- 大通公園は1年を通してイベントが多く開催され、来場者の増加に伴い**経済波及効果が大きく、にぎわい機能を担っている**。
- 日常利用とイベント利用の両方とも必要とされているが、日常利用できる期間および丁目に制限がある。
- 都心部の貴重なみどりや水を活かし、気軽に**日常利用が可能な空間・時間の確保が必要**である。

主な意見

- 都心に関する他の計画と連動させ、**総合的な観点から見たときの大通公園の位置づけ**を考えるべき。
- 各計画で考えている範囲も異なるので、**公園の範疇を超えて考えるのは絶対条件**。
- イベント時と通常時における販売行為の扱い方の大きなギャップも考えるべきテーマのひとつ。
- 都市公園の特性は様々なので、「いこい」と「にぎわい」の両立についての全国的な共通解はなかなかない。地元が納得感を持って進められるよう、試行や社会実験等、柔軟性を許容した取組の積重ねが重要。

エリアごとの特徴を生かした公園の利活用

現状

- 積雪前におけるイベント**は、多くの丁目で「緑地、芝生」を避け、舗装部にあたる**全体の約4割のみ使用**されている。
- 積雪後における使用割合は、公園全体の約6割**である。（「芝生」部分も活用）
- イベント時の日常利用を求める市民意見**がある。

課題・考察

- 多くのイベントを行う丁目などでは、水施設や花壇・芝生が活かしているのか確認が必要。
- イベントゾーンとして使われる丁目は徐々に拡大しており、通年で日常時間を過ごせる場の確保が求められる。
- 日常利用とイベント利用の両立に向けた空間の有効活用に関する検討**が求められる。

主な意見

- 「いこい」と「にぎわい」の両立を考えるには、**大通公園の位置づけを明確にする**べき。
- 「いこい」と「にぎわい」は抽象的なので、具体的に何と何を両立させるために議論するのか。また、同じ割合か片方に重心を置いて両立するのも考える必要がある。
- 大通公園をどのように位置づけていくのが重要。イベントを楽しみにしている市民は多く、「いこい」は他の公園でカバーする考え方もあるが、市民の望みを丁寧に聞いていく必要がある。

さっぽろ雪まつり

R5.2「第73回さっぽろ雪まつり」来場者による市内消費は472億円。



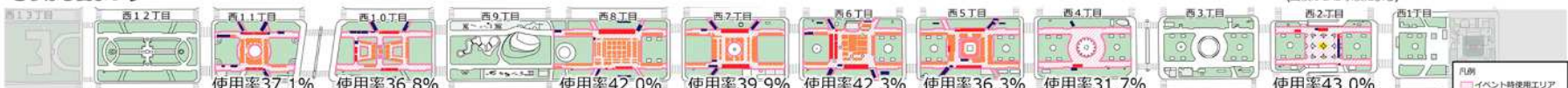
オータムフェスト

H25年時は西4~8丁目で開催。現在は西10,11丁目まで拡大している。

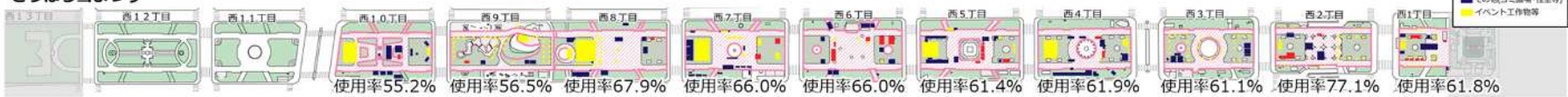


イベント時の占有レイアウトと会場レイアウト（2022年度）

さっぽろ夏まつり



さっぽろ雪まつり



大通公園の様々な利用状況



公園のいこい機能を発揮する公園敷地内外の空間形成

現状

- 多くの利用者は大通公園の中で**休息・滞留を中心に利用**している。
- 公園施設のうち一部は、「いこい」の機能を発揮しきれていない（イベント時における噴水施設など）。
- 大通公園は公園敷地外からの眺めにおいて、**みどりの軸を形成**している。
- 全国的には日常利用を豊かにするためのイベントが増えている。

課題・考察

- 都心部のみどり豊かな空間において、気軽に時間を過ごせる場づくりが求められる。
- 効果的な利用を図るため、利用者ニーズを捉えたとうえで、**日常利用とイベント利用を兼ねた施設設計**が求められる。
- 公園とその周辺との人々の流動を高めるため、公園沿道とも連携し、**日常利用機能の強化**が必要。

主な意見

- 大通公園の領域展開**が必要。道路の多目的利用も国土交通省が進めている。
- イベント期間は沿道との一体感が失われている**。お店が公園側に向き、沿道から見ると閉鎖された空間になっている。周辺も含めたにぎわいの作り出し方が重要。
- 日常利用側の視点で、どれだけ利用できる時間帯や空間があるか**という見方も必要。
- イベント開催時よりも前後の仮設・撤去期間が問題。期間も長く制約も多いので、最も阻害要因になっている。
- 札幌は四季が明確なので、各シーズンで2~3週間イベントを禁止し、市民利用期間を設けるという両立方法が理想的。短期イベントと長期イベントを区画を分けて並行開催すると利用が共存できる。

多様な園内利用の検討と実現に向けた仕組みづくり

現状

- 大通公園では**様々な利用**がされている。
- 国では地域まちづくりの課題解決に公園を利用することを指針としている。
- 園内の芝生地の占用は許可していないが一定のニーズがあり、最新事例では、日常的な芝生利用を促す仕組みづくりが確認できる。
- 園内利用の質を高める運営管理を行っている。

課題・考察

- 全国的に多様な利用を受け止めるための仕組みづくりやルールづくりが推進されており、大通公園でもまちづくりに寄与するためのルールづくりが求められる。
- 日常利用を充実させるための新たな仕組みづくりや更なるにぎわい創出に向けたイベントのルールづくりの検討**が求められる。

主な意見

- マネジメントの問題**も議論が必要。公園内だけでなく道路もパークマネジメントの領域に入れて、イベント利用や保守管理を含めて費用を捻出していく方法もある。
- 大々的なイベントだけでなく、学生やボランティアの参加など、**市民活動の場としてのイベント**も大事。
- PPPを導入し民間の力で維持管理や経営を行う仕組みに転換すべき。多様な利用の展開ができるよう、**民間・行政間の柔軟なコミュニケーションを可能にする仕組みづくり**も大事。
- ルール設定は景観でも必要**。広告物掲示へのルールはあるが、規制しきれていない実態。
- 電動モビリティが使われはじめ、園内を回遊するのに観光客には良いコンテンツ。

第3回 沿道と連携したみどりの軸の強化

公園と沿道が連携したにぎわい空間の創出

現状

- 大通公園の変遷**
- 明治期・昭和期：まちの火防線⇒市民活動空間・都市公園として整備
 - 平成期：象徴空間としての街区・道路・公園の一体整備
 - 令和期：はぐくみの軸強化方針、都心のみどりづくり方針等の策定⇒さらなる取組の推進
- 大通公園の現状**
- 沿道でまちづくりの機運の高まりも見られる。
 - 沿道側への活動的な設えは乏しい。

課題・考察

- 公園と沿道との連携について、各種計画を踏まえ、**機能的・空間的連携が一層図られるあり方**を検討していく必要がある。
- 周辺ではまちづくりの動きもあり、沿道とより一層連携することでにぎわい創出が期待される。
- 沿道との関係づくりのさらなる検討に向け、**街区・道路・公園を一体的に考える必要がある**。

主な意見

- 民間の主導する再開発は、必ずインセンティブがないと動かない。**大通公園に隣接している敷地を再開発した場合、どういったメリットを公園側に与え、どんなキックバックがあるのか**。その考え方は議論の対象に入れるべき。
- 喫煙所やトイレを設けるなど、大通公園の機能を補完するようなくとこに、インセンティブを与えるのも良い。
- 交差点で南北の移動をして公園に入る人が多く、**公園の角を広げて、沿道との繋がりを創出する必要がある**。
- 道路空間と公園の部分の関係性を物理的なこともソフト面も含めて作り直していくような思い切ったことをしないと、目目ごとにぶつ切りになっている大通公園を周囲と連携させるのは簡単でないと思う。

公園～道路～民間敷地が一体となったみどりの空間の創出

現状

- 大通公園沿道の民有地にまとまったみどりは少ないが、**近年は大通公園のみどりを意識した開発の動きも見られる**。
- 大きく育った樹木は、みどりの軸を強化する一方、**公園⇔沿道間の見合いが難しい**。
- 高木は、H27時点で全53種類、約780本あり、四季折々の変化を楽しむことができる構成。
- 大通公園の花木を代表するライラックは全街区において約300本以上植樹されている。

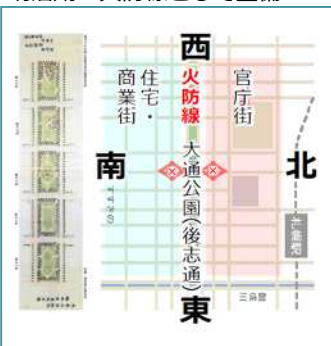
課題・考察

- 樹木が大きくなり、遮蔽部分の増加、維持管理費の増加、道路への越境が課題**。
- 沿道のみどりの量は少なく、沿道開発の機会を捉えてより一体的なみどり空間の創出を誘導していく必要がある。
- 公園としての良さと沿道との一体感を両立させる**適切な公園内の緑量を検討する必要がある**。
- 効率的かつ効果的な維持管理手法の検討が必要**。

主な意見

- みどりの軸の強化が、札幌の都心部の価値向上に繋がるのであれば、民間事業者の取組も巻き込んでいける。
- 現状の植栽密度は高すぎる状況であり、倒木の危険が高い木から優先的に対応していく必要がある。
- 本来想定していた沿道との一体感が逆に分断要素になっている側面がある**。
- みどりのどんな機能に着目して軸の評価をするのか、という議論もあっても良い。グリーンインフラの機能を強化する植栽を増やすのか、にぎわい創出のためにどんなみどりの形態があった方が良いかなど。

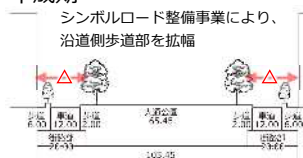
明治期：火防線として整備



昭和期



平成期



大通公園と沿道のみどりの現状



●周辺開発動向事例

大通西4南地区第一種市街地再開発事業

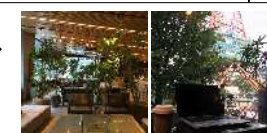
出典：大通西四丁目南地区市街地再開発準備組合



●周辺開発動向事例

ザ ロイヤルパークキャンパス 札幌大通公園

出典：三菱地所



沿道に背を向けている公園側歩道部



公園敷地と隣接した歩道部分の活用

現状

- 南北道路の沿道側歩道部は大通シンボルロード整備事業により、6mに拡幅され、**公園と一体化した快適で潤いのある街並みを形成した**。
- 公園側歩道部は、狭さ・土舗装による歩きにくさ・路上喫煙、駐輪等により歩行空間としてあまり利用されていない。また、**沿道に背中を向けた設えとな**っている。
- 冬季は雪まつり設営により園内通行止めとなることから、公園側歩道部の利用が増える。

課題・考察

- 公園側歩道部は、歩行空間とも緑化空間とも言えない中途半端な空間になっており、沿道とのつながりが薄れている。
- 沿道に対して裏側感のある道路・公園部分の一体的な活用に向けて**その位置付けやあり方を検討する必要がある**。
- 近年の社会的潮流（居心地が良く歩きたくなるまちづくりの推進など）を背景とした道路空間活用等の動き等の視点から、**道路・公園全体で適切な歩行空間を検討していくことが考えられる**。

主な意見

- ここを歩道と認識している人は少なく、デッドスペースになっている。**歩道の作り方にも課題がある**。
- 今は歩道扱いたが、例えば中央分離帯など、道路と一体化して緑化すれば、乱横断して公園に入ることや、駐輪や路駐もできなくなる。道路局との協議でぜひこのような形でやって欲しい。
- はぐくみの軸になっているので、札幌にとっては**移動の軸としても大通公園は重要**。
- ウォークブルゾーンをつくらうという話があるが、その場所に行くまでは必ずしもウォークブルでなくてもよい。あらゆる交通手段で行きやすくしないと、人口減少の中で賑わいを作ることは難しい。

地下鉄などからのアクセス性を高める地下空間との連携

現状

- 大通周辺では、沿道建物の地下空間への接続が増加しているが、**地下空間からは大通公園が認知しにくい**。
- 周辺の歩道はバリアフリー化されており、公共交通機関も含めたアクセス環境は一定の整備がされている。
- 都心部の地下空間は札幌駅～すすきの駅まで広がり、都心の回遊性向上に寄与している。

課題・考察

- 大通公園へのアクセス性は高まっているものの、地下空間から大通公園が認知しづらい等、街区・道路（地下空間）・公園がさらに一体的な空間となるよう**縦動線の強化が必要**。
- 特に沿道建物の建替等に合わせて地上と地下の往来時の利便性の向上が進む中、**象徴的な屋外空間として、訪れやすい公園のあり方**の検討が必要。

主な意見

- 大通公園の場合、目的地があるのではなく、ここを上ると地上のどこに出るのかイメージをしにくいので、利用が進まない側面があるのでは。近隣の商業施設や再開発により、**目的となるものが今後できると、地下と地上との行き来が活発になる**のではないかと。
- 公園に限らず地下から外に出ると方角が分かりにくくなる。外に出たときの自分の位置が分かりやすくなるようなサインの設置や誘導などを考えると良い。